

* 巻頭のことば *

その人がたいせつにしてきたことを、 最期までたいせつにすることを支援する

入院している児童のために通称『院内学級』を備えている病院がある。病院に併設する特別支援学校もあるし、病院内に特別支援学校の分校あるいは分教室として設置されている場合もあるし、そのほかにもいくつかの形態がある。いま私の所属している大学の医学部附属病院にも特別支援学校の分教室があり、ときどき教員の異動があるけれどもいつも素敵な先生がいらっしやる。そんな先生の一人から18年前に教えていただいたある子どもの話は、私にとってとても衝撃的だった。具体は忘れてしまったのだがともかく、その子どもは新しい問題にチャレンジすることがとても好きで、まさに亡くなろうとする最期の最期まで問題を解き、問題を解くことのできた喜びと誇りに包まれて亡くなっていったというのだ。私はこのとき、子どもの成長しようとするエネルギーは「死」をもってしても止まることのない特性なのだを知り、また、教育がそのような臨終の床にあってさえ子どもの自尊心や Quality of Life を支える支援になりうるのだということを改めて認識したのである。

筆者は最近、たいせつな友人を亡くした。遠方に暮らしていて、ときどき電話をしてくる人だったが、休日の朝早くの電話だったので、電話をとる前に不安がよぎったことも確かである。「お早うございます、どうしました?」と出ると、「先生、私ね、もうすぐイエス様がお迎えに来るのよ」と彼女。定期的に入院して治療を受けていることは聞いていたが、2週間前の電話では変わらない様子であった。高齢で一人暮らしであるため、まずは居所を尋ねると、〇〇ホスピスに居るといふ。事情を呑み込んだ私は、国際学会であちこち旅して楽しかったことに話題をふると、彼女の方も「言いたい放題言ってよく笑ったね」と。「先生に会えて、本当によかった。論文仕上がらなくて、ごめんなさい。いい論文がだいたい書けているのよ、このデータ誰かに頼んで、先生に送ってもらうから。」この辺りが、わが友はあっぱれである。電話のこっちで私が涙でびしょびしょになっているのをよそに、回顧に留まらず、前向き、未来指向である。私に投稿・公刊の約束をとりつけて、4日後に旅立っていった。

こうしてみると、最期まで何かをしようとする前向きのエネルギーが、子どもに特有のものではないことがわかる。また個人の尊厳がたいせつであり、そこにもう一人の誰かがいて、逝く人がたいせつにしてきたものが何かをわかっていることが大事なのだと思う。

(東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 上別府圭子)

無断転載禁止